

Title	The Rape of the Lock と古代叙事詩のモチーフ：「力か策略か」をめぐって
Author(s)	上村, 健二
Citation	西洋古典論集 (1992), 10: 54-63
Issue Date	1992-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/68605
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

The Rape of the Lock と古代叙事詩のモチーフ

— 「力か策略か」をめぐって —

上村 健二

I

アレグザンダー・ポープの *The Rape of the Lock*⁽¹⁾ (以下 *The Rape* と略記) の題材となったのは、1711年のある日、当時社交界の花形であったアラベラ・ファーモア嬢の一房の髪 (lock) をピーター卿ロバートなる青年が切り取ってしまったという「事件」である。ポープはこれを英雄叙事詩的な枠組みと用語を用いて滑稽な作品に仕立てた。そこでこの *The Rape* は、従来から擬似英雄詩 (mock-heroic) の系譜に属する作品として、古代ギリシア・ローマ以来の叙事詩との比較から様々に論じられてきた。一般的に、形式の高さ (英雄叙事詩的な荘重な語り口) と内容の低さ (恋愛遊戯的なささいな出来事) との落差がもたらすおかしみがこの詩の主眼とされている⁽²⁾。本稿では、毛髪略奪の方法について用いられた「力か策略か」という叙事詩的モチーフを、古代の叙事詩、特にウェルギリウス (Virgil) の『アエネーイス (Aeneid)』への allusion という観点から論じ、それを通じてポープの技巧の一端を示したい。

さて、*The Rape* は allusion の詩と呼ばれることが多い⁽³⁾。しかし、ここで取り上げる「力か策略か」というモチーフは、従来は叙事詩の常套句と見做され、allusion としての役割は軽視されてきた傾向がある⁽⁴⁾。確かに、叙事詩的な用語であっても常に allusion としての機能を持つわけではなく、単に叙事詩的な雰囲気を作り出すだけで特定の典拠の文脈とはかかわりのない場合もある⁽⁵⁾。例えば、「三たび」という表現はまさに叙事詩の常套句であり、様々な文脈で (I.17, III.137, 138, IV.162) 使われた結果、ある特定の典拠を指し示す効果は小さくなる。それに反して「力か策略か」のモチーフはすべて (II.32, 34, 103) 同じ文脈 (毛髪略奪の方法) で用いられて

いるので、これを単なる常套句として扱うことには無理がある。そこでこのモチーフを allusion の見地から検討する必要性が予想されるのである。

また、「力か策略か」という二者択一は毛髪略奪の方法をめぐるのものであり、毛髪略奪こそが *The Rape* の主題であることは冒頭の句に示されている⁽⁶⁾。

What dire Offence from Am'rous Causes springs,

何たる恐ろしい罪が恋愛上の原因から起るかを---

(I.1)

これと「力か策略か」のモチーフを含む II.103 との対応は明らかである。

Some dire Disaster, or by Force or Slight,

力によるか策略によるか、何か恐ろしい災いだが---

(II.103)

更に、*The Rape* の一つのクライマックスは Canto III の毛髪略奪の場面であり、そこでは「力か策略か」という表現は見られないものの、毛髪略奪の方法についてのこだわりが認められる (III.120, 126 など)。このように、このモチーフは *The Rape* の主題やクライマックスとのかかわりという点でも重要である。そこで私は、「力か策略か」のモチーフを主に allusion の面から考察し、それを通じて、「力」と「策略」という二つの選択肢のうち結局どちらが選ばれたのか、また、このモチーフがいかに擬似英雄詩にふさわしく処理されたか、といった問題に回答を出したい。

II

Canto II で男爵はベリンダの髪を手に入れようと決意し、その方法を思案する。

Resolv'd to win, he meditates the way,
 By Force to ravish, or by Fraud betray;
 For when Success a Lover's Toil attends,
 Few ask, if Fraud or Force attain'd his Ends.
 彼は勝ち取ろうと心に決めて、方法を思い巡らす、
 力づくで奪ったものか、策略でだまし取ったものかと。
 というのも、恋する者の骨折りに成功が伴うなら、
 目的を遂げたのが策略か力かと問う者はまずないからだ。

(II.31-4)

ここに現れた「力か策略か」のモチーフの典拠をどこに求めるべきであろうか。究極的には、ホメーロス作とされる古代ギリシアの叙事詩『オデュッセイア』にさかのぼる (1.296, 11.120)。ポープ訳の *Odyssey* I.385 (これは Tillotson の注釈に指摘されている) にも 'By fraud or force' という表現が見られる⁽⁷⁾。だが、これはむしろ — やはり Tillotson が挙げる箇所だが — ドライデン訳の *Aeneid*⁽⁸⁾ II.62 (Somewhat is sure design'd; by fraud or force;) からの借用であろう⁽⁹⁾。

ただし、*The Rape* III.34 はドライデン訳を介さず『アエネーイス』を模倣したものと思われる。なぜなら、ドライデンの英訳 (II.527 Let Fraud supply the want of Force in War) は原典 (『アエネーイス』2.390) に忠実ではなく、むしろポープの詩行の方が原典に近いからである。

以上から、「力か策略か」の典拠として重要なのはドライデン訳を含めたウェルギリウスの『アエネーイス』第2巻だと言えよう。では、典拠の文脈はどのように *The Rape* に反映しているのだろうか。

『アエネーイス』第2巻はギリシア軍の木馬の計略によってトロイアが滅びる様を描いたものである⁽¹⁰⁾。窮地に陥ったトロイア人の中でコロエブスという人物が提言する (2.390)。

dolus an uirtus, quis in hoste requirat?

策略か武勇か、敵に対する際には誰が問うだろうか。

コロエブスの言う策略とは敵（ギリシア軍）の武具を身につけることである（2.387-93）。トロイア人はこれに従う（2.394-5）。この策略は、一時的に成功するが（2.396-401）、結局は味方から攻撃されるという悲惨な失敗に終る（2.410-2）。

ここで注意すべき点は、『アエネーイス』では、「武勇（uirtus）」は単なる「力」ではなく積極的に評価されるべき徳目であり、「策略（dolus）」はその逆だということである⁽¹¹⁾。文脈に即して言えば、コロエブスの策略の失敗はギリシア軍の策略（木馬）の成功と対置されたものであり、策略はギリシア人にこそふさわしく、トロイア人（ないしローマ人）にはふさわしくないのである⁽¹²⁾。ここでウェルギリウスは、策略か武勇かという二者択一を提示することで『アエネーイス』の世界では策略と武勇とは相容れないものであることを示し、他方、ギリシア人の策略の成功とトロイア人の策略の失敗を対置することで『アエネーイス』の世界では策略は否定的に描かれ、称賛されないことを示していると考えられる。

The Rape において木馬の計略まで視野に入れるのは無理であろうか。実は、ポーブは明らかにこの策略を意識しているのである。なぜなら、「力か策略か」のモチーフのもう一つの典拠は前述の通りドライデン訳の *Aeneid* II.62 であるが、これはラーオコオンというトロイア人が木馬の計略について発する警告の言葉だからある⁽¹³⁾。更に、後の場面で木馬を示唆する表現やトロイア陥落への言及があるが、これらについては後述する。

ここで *The Rape* における「力か策略か」というモチーフとその典拠とを比較しておこう。『アエネーイス』では「武勇」と「策略」は対立するものであり、策略を選択したトロイア人（コロエ布斯）は結局失敗し、報いを受ける。一方、*The Rape* で男爵は、「力でも策略でもどちらでもよい」と考える点ではコロエ布斯に似ている⁽¹⁴⁾が、ここでどちらかを選択したわけではない。毛髪略奪の具体的方法は後にコーヒーを飲んで初めて思いつくからである（III.117-20）。また、ウェルギリウスが下した武勇と策略に対する評価をポーブが受け継いでいるかどうかはここでは明らかではないが、ウェルギリウスの生真面目な思想が滑稽な *The Rape* にそぐわないことは容易に予

想できる。この点も後に示されるのである（後述）。

III

Canto II.53ff. で守護妖精エアリエルは部下を集めて演説し、ベリンダの身に迫る災いを予告して言う。

Some dire Disaster, or by Force or Slight,
But what, or where, the Fates have wrapt in Night.
力によるか策略によるか、何か恐ろしい災いだが、
何がどこでかは運命が闇に包んでいる。

(II.103-4)

これが *The Rape* 冒頭の句を受けていることは既に述べたが、エアリエルは既に Canto I でベリンダに同様の警告をしている。

Late, as I rang'd the Crystal Wilds of Air,
In the clear Mirror of thy ruling Star
I saw, alas! some dread Event impend,
Ere to the Main this Morning Sun descend.
But Heav'n reveals not what, or how, or where:
先程、私は、大気の透き通った荒野を飛び回っていた時、
あなたの支配星の明鏡に、悲しいかな、
今朝の太陽が大海に沈まぬうちに、
何か恐ろしい出来事が差し迫っているのを見ました。
しかし天は、何がどのようにしてどこでかは明かしません。

(I.107-11)

「何が (what), どこで (where)」は I.111 と II.104 で共通している。従って、I.111 の「どのようにして (how)」は II.103 の「力によるか策

略によるか (or by Force or Slight) 」と対応することになる。つまり、災いが「どのように」起るかは——男爵の立場からは「どのように」髪を手に入れるかということだが——Canto I から一貫して問題となっているのである。

Canto III 以降は「力か策略か」というモチーフそのものは現れないが、毛髪略奪の方法については実に念入りに語られている。以下の議論では、主にCanto III の毛髪略奪というクライマックスをその方法という観点から検討したい。

IV

Canto III 25ff. でカードゲーム (オンバー) が行われ、ベリンダが勝利の凱歌を上げた (99-100) 後、これが束の間の喜びにすぎないことが示される (101-4) 。これは毛髪略奪の予示にほかならない。

カードゲームの後にはコーヒーの時間である (105ff.) 。コーヒーは男爵の頭に「輝く髪を得るための新戦略 (120 New Stratagems, the radiant Lock to gain) 」を送り込む (117-20) 。その戦略とは、男爵の行動としては、ベリンダがコーヒーを飲もうと身を屈める際に (134) 後ろから鋏で髪を切り取るというだけのことである。これは「力」と「策略」のうちどちらであろうか。‘Stratagems’ という語自体に「策略」という意味もあるが、ここではまだ力とも策略とも特定しないものと解したい⁽¹⁵⁾。「力か策略か」に対する回答は毛髪略奪のクライマックスの場面で与えられるのである。

毛髪略奪の場面で目立つのは、ふさわしい道具 (126 fit Instruments) に対するこだわりである。即ち、鋏 (147 *Forfex*, 151 *Sheers*) が様々に言い換えられ、様々な意味を付与されるのである。

まず、この鋏は ‘two-edg’d Weapon’ (128) と呼ばれ⁽¹⁶⁾、騎士の槍になぞらえられる (129-30)。「騎士」は中世的であるが、「槍」で戦うことは古代の叙事詩において「武勇」即ち「力」で戦うことを意味する⁽¹⁷⁾。

次に、この同じ鋏が ‘little Engine’ (132), ‘fatal Engine’ (149) と呼ばれる。これらの表現は、ドライデン訳の *Aeneid* に由来すると解されて

いる⁽¹⁸⁾。即ち、ウェルギリウスはトロイアを陥落させた木馬を 'machina' 「機械」と呼び(2.46)、木馬の製作者を 'doli fabricator' 「策略の作り手」と呼ぶ(2.264)が、ドライデンは前者を 'Engine' (II.60)、後者を 'who the fatal Engine fram'd' (II.345)と訳している⁽¹⁹⁾。木馬は「策略」(ラテン語で *dolus*)であるから、'fatal Engine'などの表現を通じて、鉄には策略という一面が付与されるのである。

このように、毛髪奪略の手段である同じ一つの鉄が、力と策略の両面を兼ねることになる。合さる刃先(153 The meeting Points)は力と策略の両方を合せ持つものと言えよう。「力か策略か」という問題は片方だけを選ぶことなく解決されたのである。

髪が切り取られ(151-4)、ベリンダが悲鳴を上げ(155-60)、男爵が凱歌を上げた(161-70)後、作者は鉄(Steel)の力について語る(171-8)。この一節は古代ローマの詩人カトゥッルス第66歌(普通「ベレニーケーの髪」と呼ばれる)を典拠としている。この作品は、Canto IV. 171-2でも示唆され、V.129-30でははっきりと言及されて、ベリンダの髪がベレニーケーの髪になぞらえられるという点で重要である。しかしながら、*The Rape* III. 173-4に現れた、鉄の力の例としての「トロイアの陥落」はカトゥッルス第66歌には言及されていないのである。ポーブは、典拠にあったペルシア戦争の故事をトロイア陥落に変えたのである。ここには何らかの意図があるものと思われる。

トロイア陥落は木馬の計略と切り離して考えることはできない。事実、ここでの「鉄」は、鉄のことであるから、前述のように既に allusion によって木馬の策略と結びついている。鉄を 'fatal Engine' と呼ぶことで、毛髪奪略がトロイアの陥落になぞらえられたとも言えよう⁽²⁰⁾。

ここで問題となるのはこの鉄についての一節と「力か策略か」のモチーフとの関連である。既に述べたように、「力か策略か」というモチーフの典拠は『アエネーイス』2.390と、ドライデン訳 *Aeneid* II.62に求めることができた。このうち後者は木馬の計略に言及したものであった。力と策略のうちどちらがトロイア陥落を決定づけたのかは古代の叙事詩において重要な問題であるが、一般的にトロイアは木馬という策略で滅ぼされたと考えられて

いる⁽²¹⁾。この点は特に、「力か策略か」というモチーフの典拠である『アエネーイス』第2巻で強調されている⁽²²⁾。従って、単純にトロイア陥落に言及すれば、木馬という策略を示唆することになる。

しかし、'Steel' は、ラテン語の 'ferrum' と同様、「鉄」の他に「剣」の意でも使われ得る語である⁽²³⁾。剣で戦うならば武勇（力）を用いることになる。事実、この一節の最後の行（Ⅲ.178）には鉄の力（Force）という言葉が現れる。従って「鉄」には「力」という面がある。

つまり、ここにも力と策略の両面が認められるのである。ポーブは、トロイアの陥落に、それになぞらえられた毛髪略奪と同様、力と策略の二面性を持たせたのである。

V

The Rape におけるポーブの技巧については従来から数多くの研究が行われている。例えば、有名なベリンダの化粧の場面（Ⅰ.121ff.）ではベリンダが女神とそれに仕える巫女の両方になぞらえられるが（122-4）、それを可能にしたのは鏡という道具を通じてであった。つまり、巫女たるベリンダは鏡に映る自分の姿（＝女神）を崇拜しているのである⁽²⁴⁾。

或いは、ベリンダを『アエネーイス』第4巻のディードーになぞらえる技法（Ⅳ.1-2）もよく知られたものであろう⁽²⁵⁾。即ち、表面上は男を退けるベリンダが深い内面では男を求めていることを暗示しているのである。

「力か策略か」というモチーフの扱いには、こうしたポーブの技量が一段と高度に発揮されているように思われる。即ち、ポーブは、主題である毛髪略奪の方法についての表現に工夫を凝らし、様々な allusion を通じて、鉄を力と策略の両面を持つものとして示した。その際ポーブは、主たる典拠である『アエネーイス』では相容れぬものとして峻別されていた力と策略を一つに結びつけることによって、本来は重大かつ深刻な問題をはらむ「力か策略か」のモチーフを、mock-heroic というジャンルにふさわしく巧妙に処理し、利用したのである。

注

(1) テクストは、G.Tillotson ed., *The Rape of the Lock and Other Poems* (*The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. II, London 1940) を使用。

(2) J. S. Cunningham, *Pope: The Rape of the Lock*, London 1961, 9-11, P.Rogers, *An Introduction to Pope*, London 1975, 36.

(3) R. A. Brower, *Alexander Pope: The Poetry of Allusion*, Oxford 1959, Earl R. Wasserman, "The Limits of Allusion in *The Rape of the Lock*", *Journal of English and Germanic Philology* 65 (1966), 425-44, 小林章夫, 「Allusion の文学 — *The Rape of the Lock* の世界 —」, 同志社女子大学学術研究年報 34(1), 1983, 30-47.

(4) Tillotson, op.cit., 159, Cunningham, op.cit., 48-9.

(5) Wasserman (op.cit., 425-7) は, allusion として意味のない「繰り返し現れるラテン語的表現」を列挙している。

(6) 主題が冒頭に示されること(いわゆる proposition) は叙事詩の約束事と見做されていたようである。Cf. Tillotson, op.cit., 144.

(7) テクストは、M.Mack ed., *The Odyssey of Homer*, Books I-X II (*The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. I X, London 1940) を使用。

(9) テクストは、J.Kinsley ed., *The Poems of John Dryden*, Vol. III, Oxford 1958) を使用。なお、『アエネイス』の原典については、R.A.B. Mynors, *P. Vergili Maronis Opera*, O.C.T. 1983 (1969) を用いる。

(10) 以下の議論については、上村健二, 「『アエネイス』におけるニススとエウリュアルス — *dolus an uirtus* めぐって —」, 京都大学西洋古典研究会 『西洋古典論集』VIII, 1990, 43-54 と重複する部分がある。

(11) 岡道男, 「古代叙事詩の序歌 — 『アエネイス』について —」, 『西洋古典学研究』26, 1978, 1-22 参照。

(12) Cf. G. Williams, *Technique and Ideas in the Aeneid*, New Haven/London 1983, 256.

(13) 平井隆, 「英雄戦士ベリンダ その二」, 山口大学教養部紀要 (人文科学篇) 21, 1987, 165-79 (特に 168-9) は, この点を論じ, 毛髪略奪とトロイア陥落とのコンテクストの類似を指摘している.

(14) 平井, 前掲論文, 169 参照.

(15) 'gain' (Ⅲ.120) という動詞は, 'ravish' や 'betray' (Ⅱ.32) とは違って, 'win' (Ⅱ.31) と同様に, 力か策略かという点で中立的な意味で用いられているように思われる.

(16) 'two-edg'd' という語自体に「両義的な」という裏の意味が込められているとも考えられる.

(17) 『オデュッセイア』 11.120 には 「策略によってかそれとも鋭い青銅で公然と」とある. 「鋭い青銅」とは槍や剣のことである. 『オデュッセイア』におけるこのモチーフについては, 岡道男, 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』 (創文社, 1988) 第1部第5章を参照.

(18) Brower, op.cit., 144,

(19) 平井, 前掲論文, 175 参照.

(20) W. E. H. Rudat, "Pope and the Classical Tradition: Allusive Technique in *The Rape of the Lock* and *The Dunciad*", *Anglia* 100 (1982), 435-41.

(21) 『オデュッセイア』 8.492-520, 22.226-30 などを参照. これに対し, 『イーリアス』 (*Iliad*) では, 木馬の計略は背景に退き, アキレウスがヘクトールを倒すことがトロイア陥落を決定付けるかのように語られることで (22.38-76, 405-11), 策略よりも武勇 (力) が強調される. 但し, ポープの考えがそこまで及んでいたかどうかは疑問である.

(22) 『アエネーイス』 2.195-8 では, 武勇ではなく策略でトロイアが滅びたという無念さが語られている.

(23) Cf. Tillotson, op.cit., 179.

(24) Cf. Tillotson, op.cit., 154, C. Brooks, *The Well Wrought Urn*, New York 1947, 83.

(25) Cf. Wasserman op.cit., 439-41.